

モード Mode Mode は語る

女性も仕立てたスーツを

中野 香織

仕立てのよいスーツはかつて成功した男性の憧れと誇りだった。今、起業して成功した男性は「スーツを着なくていい自由」を選び、カジュアルな装いで会議に出る。コロナ禍がさらにスーツ離れを後押しする。

ビスポーク・スーツの聖地、ロンドンのサビルロウも苦境に陥っている。老舗が実店舗を閉め、象徴的存在のギーブズ&ホークスは親会社が倒産し、経営の先行きが見えない。

こうしたスーツ界の窮状を救う「女神」として脚光を浴びるのが、女性のテーラードウェア需要と女性



テーラーで対話を重ねて仕立てたスーツは流行に左右されない

テーラーだ。英フィナンシャル・タイムズは1月末、「女性たちがサビルロウを救えるか？」という記事を載せた。2016年に初の女性マスター

好みの探究が自己理解に

テーラーとなり今は自分の店を構える女性や、19年に女性向けのテーラリングハウス「ザ・デック」を創業した女性らの活躍を紹介する。

実は私も2016年に初めてテーラーにスーツを仕立ててもらって以来、女性の選択肢を増やし、サステナブル志向にも合致するという意味で最適なシステムだと確信している。結婚式に何を着て出席しようかと頭を悩ませる必要はなく、男性のようにスーツと決めてしまえば楽。サイズはぴたりで本物感があり、流行型はないので、長く着ることができる。

日本での難点は、女性のスーツを仕立てるテーラーが比較的限られてくるといふ点だ。なぜ女性服を扱わないのかとあるテーラーに聞いたところ、「女性は変わりやすいから」という答えが返ってきた。体形でなく、「生地を決め、仮縫いを経ているのに、仕上がる直前で女性は気が変わる」ことが多いという。

女性もテーラーも、相手の文化や気質を学び、率直に話し合い、信頼を築きあうところから始めなくてはならないようだ。好みに関する話し合いを通して自身への理解も深まるので、本物の自信を持ちたい方には推奨する。女性もテーラーでスーツを仕立てる。こんなジェンダーフリーがあってもよいのではないか。